令和６年度

「まちのひろば創出職員プロジェクト」

報告書

川崎市市民文化局コミュニティ推進部
協働・連携推進課

令和６年度 「まちのひろば」創出職員プロジェクト 報告書

●目次

１ 概要
２ これまでの取組 （令和元年度～５年度）
３ 今年度の取組 （令和６年度）

●職員プロジェクトメンバー ９名

（グループＡ）

1 梅澤 登紀夫 建設緑政局道路河川整備部公共用地課（一般事務）
2 牧野 のぞみ 健康福祉局生活保護・自立支援室（一般事務）
3 大西 明 健康福祉局保健医療政策部・環境保健・アレルギー疾患対策担当（一般事務）
4 増田 浩之 宮前区役所まちづくり推進部 向丘出張所(一般事務)

（グループ B）

5 白井 秀興 高津区役所まちづくり推進部生涯学習支援課（一般事務）
6 嶋田 洋紀 麻生区役所地域みまもり支援センター保護課（一般事務）
7 髙橋 ありさ 川崎区役所道路公園センター管理担当（一般事務）
8 米澤 快人 麻生区役所区民サービス部区民課（一般事務）
9 山岸 朔太郎 高津区役所危機管理担当（一般事務）

●事務局・オブザーバー（市民文化局コミュニティ推進部）

10 鈴木 尚子 協働・連携推進課（一般事務）
11 字廻 清美 協働・連携推進課（一般事務）
12 石見 隼人 区政推進課（一般事務）
13 山手 祐輔 区政推進課（一般事務）
14 渡辺 泰斗 区政推進課（一般事務）
15 小林 芳 協働・連携推進課（一般事務）…グループ B オブザーバー
16 萩原 彩加 協働・連携推進課（一般事務）…グループ A オブザーバー

1　概要

本市は、暮らしを取り巻く社会環境の変化を見据え、市民一人ひとりが多様なつながりをつくり、自分らしく幸せに暮らせる地域社会の実現を目指して、平成 31（2019）年３月に「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」（以下「基本的考え方」という。）を策定しました。「基本的考え方」の中では、地域レベルの取組として、多様なつながりを育み、誰もが気軽に集える出会いの場として、多様な地域資源を活用した地域の居場所を「まちのひろば」と名付けて、市内に創出していくこととしています。

この取組を推進していくためには、行政としても、公共施設の地域化、民間資源の活用推進及び「まちのひろば」の自主性や自律性を尊重した支援などを進めるとともに、「市民創発」がもたらす様々な変化や動きに呼応することが求められていることから、職員の意識改革と人材育成が必要です。

こうしたことから、職員参加と意識改革の推進及び「まちのひろば」の見える化を目的に、職員自らが地域に出て「まちのひろば」のモデルを実践していく、これまでにない庁内横断型のプロジェクトチームを令和元年度に新たに設置し、地域の方など多様な主体と連携しながら多くのモデル実践を行い、新たな「まちのひろば」を生み出してきました。

地域に広がる「まちのひろば」
～希望のシナリオのイメージ～

2　これまでの取組

（１）令和元年度

取組初年度ということもあり、若手職員を中心に多くの応募があり、オブザーバー２名を含め 22 名で４つのグループに分かれて活動し、以下の実践を行いました。

- 古い木造住宅が多い密集市街地の火災の延焼防止や災害時の一時避難場所とし設けられる「防災空地」を活用したマルシェの実施。
- 市内大企業の配水所未利用地の有効活用を目的とした「FUSO グリーンガーデンを活用したまちのひろばの創出について」の取組。（※悪天候によりイベント実施に至らず）
- 飲食店と連携したスナックや、JR 川崎駅コモレビテラスでのワークショップの開催等、地域の声を具現化した「まちのこえをカタチにするプロジェクト」の実施。
- NEC の公開空地を活用したイベント実施や NEC 玉川事業場との共創による、さまざまなイベントの実施。

飲食店と連携したスナック
「日進町コミュニティスナック」

地元町内会と協働した
小田防災空地でのマルシェ
「小田ランタン横丁」

（２）令和２年度

新型コロナの感染拡大により、これまでと同様の手法で顔を合わせて集うことが難しくなったことから、令和２年度については、新しい取組を行うのではなく、前年度の取組を深化させながら、「新しい生活様式」に対応した新たな居場所やつながりづくりを実践していくこととし、テーマを「まちのひろば with 新しい生活様式」の創出としました。

令和元年度から継続実施する２つの取組（小田の防災空地、NEC の公開空地を活用したイベント）を中心に、新しい生活様式に対応した「まちのひろば」づくりを実践することとし、昨年度からの継続メンバーを含めた 15 名が３グループに分かれて活動しました。

・防災空地を活用し、街中に非日常の楽しさを生み出す地域交流のマルシェを地域の方と企画し実現。

・NEC 公開空地にて敷地所有者、地域関係者と連携して実証実験を行い（中原区のご当地体操、ほしぞらディスコなど）、活用の可能性や課題、望ましい運営体制を模索。

・幸区の鹿島田駅前交通広場ほかで、新川崎タウンカフェなど地域のキーパーソンとともに、コミュニティガーデン創出の取組を実施。

また、令和２年度からの新たな取組として、働き方改革や職員の人材育成の観点から勤務時間外に自主的な活動として参加できるサポートメンバーを募集し、集まった８名のサポートメンバーも可能な範囲で取組に参加してもらうことになりました。

NEC の公開空地を活用した
「ほしぞらディスコ」

鹿島田駅前交通広場を活用したイベントへステップアップ

（３）令和３年度

３年度の参加者は３名と少人数でしたが、その分各自の思いをより深く盛り込みながら、「公共施設の地域化から生まれるまちのひろば」などをテーマに以下の取組を行いました。

・こども文化センターと老人福祉センターの複合施設「ふれあいプラザかわさき」ロビーで、こども文化センターの貸会議室登録団体と連携して、駄菓子屋や昔遊び、エクササイズ等の多世代交流イベントを実施。

・コロナ禍で交流が進まないときだからこそと、つながりを創出するためのおためしオンライン交流会を実施。

・多摩川スカイブリッジ開通に合わせたフォトコンテストを開催。同ブリッジ開通式には、フォトコンテストに連動した特別な場所からの写真撮影が可能なフォト交流会を実施。

お手玉で子どもと高齢者の多世代交流

（４）令和４年度

４年目の取組となった同プロジェクトについては、３年度まで別に行っていた「地域コーディネーター研修」のステップアップ編と位置付けて実施しました。合同で行うことで、初級編として研修で座学を学び、ステップアップ編のプロジェクトで実践してより深い学びとする、という流れができました。また、プロポーザルによる業務委託で石塚計画デザイン事務所により、地域コーディネーター研修の講義から引き続きプロジェクトの各グループへのアドバイスや企画作り等のポイントのレクチャーを受けながら進められたことで、安定したプロジェクトの進行を行うことができました。

令和４年度は、14 名の参加者に、事務局のコミュニティ推進部から４名の職員がオブザーバーとして加わり３つのグループで事業を実施しました。また、自主的な活動として参加するサポートメンバーを庁内から広く募集し、オフサイトミーティングでの交流や実践の手伝いなどの協力体制をとりました。サポートメンバーには、過去のプロジェクトに参加していた職員も数名加わっていたことから、アドバイザー的な立場でも関わってもらうことができました。

新型コロナウイルス感染症の影響が続いていることから、コロナ禍における新しい生活様式の意識を持ちつつも、自由な発想で、地域の方々のご協力を得ながら、以下のとおり「まちのひろば」創出のモデル実施を行いました。

・「ミライの青空紙芝居」（グループ A）

登戸土地区画整理中によるこどもの遊び場不足の解消やママ同士の交流の場を創出するために、区域内の未利用地「ミライノバ」を活用し、市民活動団体と連携した紙芝居やコーヒーショップ出店などを実施。

「多摩区絵本の会」さんの読み聞かせ

・「テーブルゲーム　みんな集合！」（グループ B）

転入世帯が多い鹿島田エリアで小学生とその保護者を対象に、同エリアの民間施設にて参加者同士が大笑いしながら交流ができるテーブルゲームを実施。

テーブルゲームで初対面同士も楽しく

・生田地区防災訓練との連携イベント（グループ C）

町内会主催の防災訓練で、関連グッズの配布や絵本の読み聞かせ等、イベントの充実化を図ることで、町内会未加入者など新たな参加を生み、町内会未加入・加入者の交流を促進。

町内会の防災訓練へのジョイント

（5）令和５年度

５年目の取組となった同プロジェクトについては、４年度に地域包括ケア推進室で実施した「地域マネジメント研修」（主に地域ケア推進課や地域支援課の職員など、区で地ケアの観点から地域づくりに関わる職員が参加）の要素を取り入れ、地域包括ケア推進室（健康福祉局）、人材育成課（総務企画局）との協力のもとで実施することで、「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」に加え、「地域包括ケアシステム推進ビジョン」「区役所改革の基本方針」「川崎市人材育成基本計画」も意識した研修内容となりました。

今年度は、11 の局区から、若手を中心に計 15 名の職員が参加、３グループに分かれてプロジェクトを実施しました。それぞれのグループには、アドバイザーとして令和４年度に引き続きプロポーザルによる業務委託で石塚計画デザイン事務所が、オブザーバーとして事務局のコミュニティ推進部から職員がオブザーバーとして加わり、自由な発想で「まちのひろば」創出のモデル事業実施を目指しました。

プロジェクトメンバー同士で様々な思いやアイデアを交換し、小さな”Do”を大切に進めた結果、当初思い描いていた企画とは違う内容になっていったグループもありました。そのことは必ずしも計画どおりに進まなくても充実した成果を生み出すことができるという、まさに「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」に示されている「市民創発」の実例であると考えます。

※ 各グループの企画概要 ※

（１）身近な場所で自然体験～公園で自然とつながろう～（Ａグループ）

①エコクラフト・市内の自然レクチャー

エコクラフトを始めとした空き缶ランタン、くるみキャンドルの作成等の工作や川崎市内の自然のレクチャー

②焚き火体験

NPO 法人国際自然大学校が運営する麻生区の黒川青少年野外活動センターのご協力のもと、薪割りから火起こしまで行うことができる焚き火体験を実施。

工作の様子

火起こしの様子

各工程を進める中で、親子同士が協力するところや同じグループ内で別の家族同士で交流するところ、中には、子ども同士でどうやったらうまくできるか教え合う姿が見受けられました。

（２）REAL VOICE上映会～コミュニティにできることを考えよう～（Ｂグループ）

SNSなど様々な形でつながりが生まれているなかで、文化や育ちの背景に関わらず、誰も取り残されない、誰もが安心して生活できる社会の実現に向けて、「つながり」をテーマにしたＴＯＨＯシネマズ川崎での上映会とパネルディスカッションを実施。

（当日は無事に市長にもご参加いただくことができました。）

（３）ボッチャを通じた世代交流を楽しもう！@かないばら苑♪（Bグループ）

「１回限りとならない多世代交流」を目的とし、ボッチャをやったことのない高校生が、ボッチャ経験のある高齢者と一緒にゲームをする企画を、長寿日本一でボッチャ大会も行っている麻生区で実施。

座って実施（社会福祉法人徳心会 菅の里）

（４）「広げていこう気付きの輪　繋げていこう木月の和」（B グループ）

社会福祉協議会からのご紹介で、保育、高齢者、障害者、児童・母子の分野の地域団体へ個別ヒアリングを実施。つながりのネットワークを作ることとなり、名称を「広げていこう気付きの輪　繋げていこう木月の和（【略称】木月のわ）」と決定し、簡単な交流会を開催。当日は、木月ほほえみ保育園の年長園児も参加してくれました。

簡単な交流会の様子

（５）どうして公園はいつもきれいなの？ヒト型すごろく（グループＣ）

日頃から遊んでいる公園で、人々のつながりだけでなくゴミのポイ捨てや維持管理の担い手不足といった公園をとりまく課題を解決するきっかけとなるミッションを織り交ぜたヒト型すごろくイベントを公園管理運営協議会の協力をいただき開催。

ヒト型すごろくを体験

３　今年度の取組

（１）概要

６年目の取組となった本プロジェクトは、令和５年度に引き続き「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」に基づき、「地域包括ケアシステム推進ビジョン」「区役所改革の基本方針」「川崎市人材育成基本計画」を意識した研修内容となるよう実施しました。

今年度は、６ つの局区から、若手を中心に計９名の職員が参加、２グループに分かれてプロジェクトを実施しました。それぞれのグループには、アドバイザーとして令和４・５年度に引き続きプロポーザルによる業務委託で石塚計画デザイン事務所が、オブザーバーとして事務局のコミュニティ推進部から職員がオブザーバーとして加わり、自由な発想で「まちのひろば」創出のモデル事業実施を目指しました。研修の運営にあたっては、多様なメンバー間における「合意形成能力」の向上を重要な視点として設定し、研修をすすめました。

（２）全体の流れ

プロジェクト全体の流れは以下のとおりです。全体で集まる集合研修を ３ 回行い、その間のフィールドワークでは、グループごとに、現地視察や地域の方へのヒアリングや打合せ等を行いました。また、オフサイトミーティングとして、過去のプロジェクトに参加した職員へ呼びかけて、企画案に対してアドバイスをもらう機会を設けました。そのほか、グループごとに、オンラインも活用しながらミーティング等を随時行いました。

４月　参加者募集
５月　地域コーディネーター研修（初級編）

《まちのひろば創出職員プロジェクト》

７月　集合研修１回目　顔合わせ・アイデア出し
～８月　フィールドワーク①前半（企画検討）
８月　オフサイトミーティング
～10 月　フィールドワーク①後半（企画づくり）
10 月　集合研修２回目　中間報告
～１月　フィールドワーク②　イベント実施
２月　集合研修３回目　成果発表

集合研修は、地域資源を知るというねらいで、民間のスペースも含め、市民活動・交流の場となっている特色ある会場でそれぞれ実施しました。

（３）第１回集合研修

日時：令和６年７月 18 日（木）13 時 30 分～17 時
場所：パサールベース　（武蔵新城駅　徒歩３分）
内容：オリエンテーション（研修の目的/目標の確認、スケジュールの共有）
講義①（まちのひろばについて・地域コーディネートとは）
講義②（企画づくりのポイント）
グループミーティング（活動場所、企画テーマのアイデア出し、行動予定など）

はじめにオリエンテーション、自己紹介をした後、企画づくりのポイントなどの講義をはさみ、グループに分かれてアイデア出しのワーキングを行いました。最後に、各グループから話し合った内容についての発表を行い、それぞれのグループからは、以下のようなキーワードが出ました。

・グループＡ・・・川崎市への愛着、北部地域と南部地域、新住民
・グループＢ・・・多文化交流、多文化共生のまちづくり、海外経験

ここから各グループで、地域の方や庁内の関係部署へのヒアリングを行いながら、どこでどんな人たちを対象にどんな「まちのひろば」をつくっていくのか、企画を詰めていきます。

（４）オフサイトミーティング

日時：令和６年８月 19 日（月）18 時半～20 時半
場所：白いハコ（向ヶ丘遊園駅北口すぐ）
内容：各グループの企画案の発表及び
　　ブラッシュアップ

第１回から約１か月の間、各グループで調査、話し合いを深めてきた企画案に対し、石塚計画デザイン事務所と、ボランティアでの参加を呼びかけた過去のプロジェクト参加職員からアドバイスや感想をいただきました。

（５）第２回集合研修

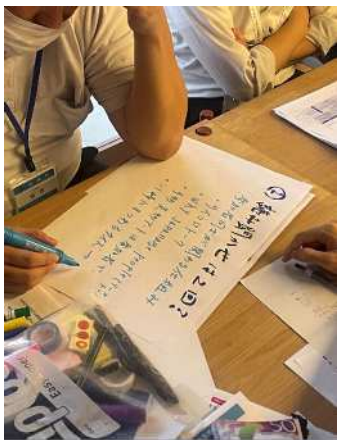
日時：令和６年 10 月 24 日（木）13 時半～17 時
場所：たちばなハット（JR 武蔵新城駅からバス８分）
内容：各グループからの企画発表、ブラッシュアップ、グループミーティング
　　講義（参加してほしい人に届けるための PR 方法、チラシの作り方、実践当日の記録や振り返りについて）

オフサイトミーティングから約２か月、地域の方との打合せや庁内の調整などを進めながら、さらに具体的になってきた企画について各グループから発表を行い、アドバイザーの石塚計画デザイン事務所からアドバイスや感想をいただき、ブラッシュアップを行いました。各グループの企画タイトルは、以下のとおり。

・グループＡ・・・集まれ！みんなの「多摩り場　北部をもっと推せるまちにしよう！」
　　（ダンス、絵本の読み聞かせほか）
・グループＢ・・・＼It’s a small world／　川崎に小さな世界をつくりたい！
　　（民族衣装の展示、外貨展示や言語の表示ほか）

“まちのひろば”の候補ともなりうる地域の素敵な場所で研修を実施したいと検討し、レンタルスペースやカフェスタンドなどを併設した地域の交流の場『TACHIBANA HUT（たちばなハット）』にて開催することとなりました。橘公園内の同施設は、都市公園法に基づく公募設置管理（Park-PFI）制度を活用した、民間事業者による再整備工事により、旧西部公園事務所が、６月１日（土）にリニューアルオープンしたものです。

ここからいよいよ実践に向けて具体的に準備を進めていきます。



（６）第３回集合研修

日時：令和７年２月１２日（水）13 時 30 分～16 時 30 分

場所：川崎市役所本庁舎 203 会議室

内容：各グループの成果発表と講評、職員プロジェクトの振り返りと共有

前半は、７月の第１回集合研修から約半年かけて、各グループで企画、実践を行ってきた成果を発表しました。当日は、参加職員の職場の上司の方や関心のある職員の方など、11 名の方々にご参加いただきました。

各グループとも実施された企画内容には多くの創意・工夫がほどこされ、丁寧に練り上げられていました。また、研修報告・発表全体においても各グループの熱意が伝わり、大変見ごたえ・聞きごたえのある発表となりました。

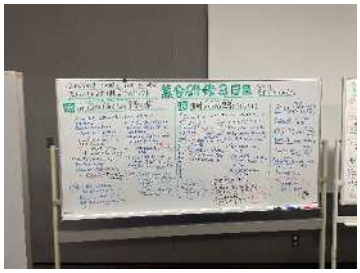
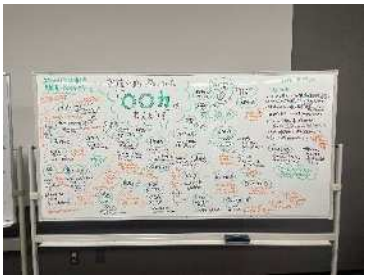
各グループの発表に対しては、アドバイザーの石塚計画デザイン事務所より講評があり、「A チームは人や団体とのつながりがうまく出せていた」「B チームはテーマ決めから実施までぶれずにプロセスが充実していた」といったコメントをいただきました。また、見学者からは「子育て関係のイベントに地域の男性を集めたことがすごい。何かポイントだったのか？」などの質問がありました。参加職員の職場の上司の方からは「職場とはまた違った姿が研修の場で引き出されている。」等の感想をいただきました。

研修の後半は、「経験をこれからにつなげよう！・経験を力に変えよう！」がテーマの振り返り講義を受けた後に、「実践を通じて身についた『〇〇力』を考えよう！」という個人ワークを実施しました。個人ワークで自分自身の気づきや変化、今回のプロジェクトで身についたと思うことなどを確認し、全体で共有しました。

当初、研修運営側としては「コミュニケーションの力、情報を収集する力、企画する力、マネジメントする力、実践する力」を基本的なものとして挙げていましたが、研修参加者からはそれ以外にも「巻き込み力」「お任せ力」「足でかせぐ力」「猫の手力」「ブレない力」のほか合計２５の「力」の発見があったことが発表されました。特に、チームで企画を進める中で大切なこととして、「自分が業務で多忙な時はメンバーを信じてお任せするという『お任せ力』」、「いざという時は猫の手のように何でも動くという『猫の手力』」などの工夫があげられました。そして、全体的な感想としては「ヒアリングを通じて、企画する行政と対象となる当事者では課

題意識に違いがあることに気付いた」、「相手の共感や協力を引き出すためには、地道に当事者の方と言葉を交わすことが大切と感じた」など、実際に地域に出て対話することを通してのみ得ることができる気づきがあったことが報告されました。

石塚計画デザイン事務所からは、「まちのひろば」の創出には、現場（地域）を知り、必要な支援について市民目線から実感することが大切なため、今回のプロジェクトをとおして、行政と市民の両面から地域を見る経験ができたのではとのお話をいただきました。また、普段から楽しみながら地域に入り込むこと、地域から学ぶ姿勢をもつことが大事だとのメッセージをいただきました。

次の章では、各グループからの取組レポートを紹介します。

４　各グループの取組内容

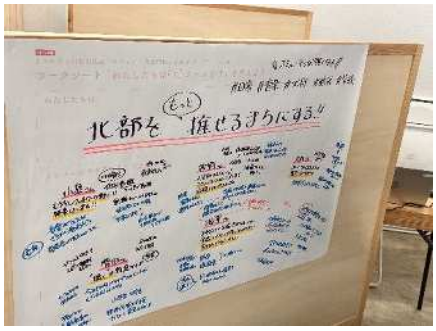
あつまれ！みんなの“多摩り場”～北部をもっと推せるまちにしよう！！！～　（A グループ）

●プロジェクトメンバー

大西　明　　（健康福祉局保健医療政策部環境保健・アレルギー疾患対策担当）
梅澤　登紀夫　（建設緑政局道路河川管理部公共用地課）
牧野　のぞみ　（健康福祉局生活保護・自立支援室）
増田　浩之　　（宮前区役所向丘出張所）

ア　キックオフ

第１回集合研修（７月１８日開催）では、本プロジェクトでどのようなことをやりたいか、グループ内で話し合いを行いました。話し合いの中で、グループメンバーの１人が、旅行先で出会った登戸出身の方から東京が出身地であると言われたことが話題にあがり、それをきっかけに、川崎市に対する愛着が薄いのではないかという仮説を設定しました。きっかけが多摩区登戸地域出身の方の経験であったことや、川崎市に対するイメージ調査結果から、川崎市と言えば川崎駅周辺などの南部地域が栄えているイメージが強いということがわかったので、北部地域に対する愛着を深めたいという思いが湧きあがり、「北部をもっと推せるまちにする」ことをテーマに掲げました。



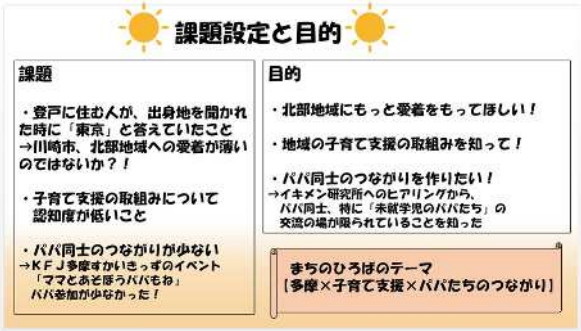
イ　準備

本プロジェクトを進めるにあたって、私たちはまず、日本女子大学の薬袋教授に話を伺いました。グループメンバーの１人が学生時代に所属していた研究室の教授であり、かつ、その研究室で日本民家園の研究を行っていたことから、多摩区でのイベントに繋げるヒントを得られないかと考えたからです。登戸周辺の区画整理事業について話題にあがり、新規流入者をイベントに呼び込むのも良いのではないかというアドバイスをいただきました。

次に、多摩区ソーシャルデザインセンター（多摩 SDC）へのヒアリングを行い、多摩 SDC 事務局長の俵さんから、「ママ達は地域活動に参加するが、パパ達の参加が少ないので、パパ達を呼び込むイベントを行いたい」という話を伺いました。さらに、石塚計画デザイン事務

所の佐々木さんからも、多摩区周辺では生き生きと子育てしている方が多いというアドバイスをいただいたことから、多摩区でパパと子どもが関わりながら、さらにパパ友の輪を広げられるような企画を実施できないか、検討することになりました。そして、パパ達をメインターゲットとする企画を行うにあたり、実際にパパ同士のコミュニティづくりをしている「イキメン研究所」（“イキメン” とは、「家庭でも地域でもイキイキと過ごすパパ」のこと。男性自身が自分はもちろん家族も、地域の人もうれしい子育て・家事参加のあり方を研究・発信しながら、地域のなかでパパネットワークを広める活動を展開。）へのヒアリングを行うと、パパ同士の繋がりづくりの難しさが見えてきました。最終的に、本プロジェクトを通して、地域で活動する方々と連携しながら、パパ同士の繋がりを広げていくことを目的として定めました。

私たちが北部地域の課題として挙げたことは３つあります。１つ目は、第１回集合研修の時に話題となった地域への愛着が薄いこと、２つ目は子育て支援の取組みについて認知度が低いこと、そして３つ目はパパ同士の繋がりが少ないことです。以上の点を背景として、多摩区と子育て支援、そしてパパ同士の繋がりを生み出すイベントを企画、実施しました。



開催場所については、「子どもが行き慣れていて、かつ今後も行きやすいような場所」と考え、第一候補として多摩区子育て支援センターを検討しました。子育て支援センターを所管している多摩区保育所等・地域連携担当の職員の方に相談をし、令和６年 11 月に開所予定の「地域子育て支援センターつちぶち」の月 1 回の土曜開所日にイベントを共催で開催させていただけることになりました。

ウ 広報

１月から広報を開始しました。イベントの会場である「地域子育て支援センターつちぶち」や近隣の子ども文化センターや小児科のある医療機関等にチラシの配架を依頼しました。また、イベント内容を協議するにあたって相談させていただいていた多世代交流サークル「NAGOMI」メンバーの皆様やベビーヨガの講師を引き受けてくださった楠部様が、御自身のSNS にてイベントの告知をしてくださいました。

さらに、参加人数に応じて職員の方が、子育て支援センターつちぶち利用者へお声がけをし広報の協力をしていただきました。

エ　イベント実施

イベント当日は 22 組 56 名（うち施設初回利用者 8 組）にご参加いただきました。イベント内容としては 2 部構成で、①こどもとのコミュニケーションを図りつつ体を動かせるベビーヨガと②マップづくりを通じてパパさんとのつながりを創出するプログラムを行いました。

①のベビーヨガでは、多摩地域で活躍されているベビーヨガの講師の楠部さんにご登壇いただき、アイスブレークも兼ねて実施する運びとなりました。

②のマップづくりでは、多摩地域の子育てに関連したスポットを地図上にシールで貼ってもらう中で、パパ同士が自然に会話できることを狙い、実施しました。

具体的には、多摩区観光協会作成の「ＨＡＮＡＭＯＳＵ　MAP」をベースに、①子どものテンションが上がる場所(赤)、②子ども連れでも行きやすい飲食店(青)、③お父さんでも入れるバリアフリートイレ等(緑)の 3 点を各自シールで貼り、グループワークの中でそれぞれがその理由を話し情報共有を行いました。グループ分けでは、参加者のお子様の月齢が近くなるように３つの班に分け、共通した話題作りができるよう工夫を凝らしました。また、各班には前半でヨガの講師を引き受けて頂いた楠部さんをはじめ、多摩区１００人カイギ/むらけんさん、イキメン研究所/臼居さんにファシリテーターとして入っていただき、パパ同士のつながりづくりや多摩地域に精通した方にご協力いただきました。重ねて、各グループに職員が記録係として参加し、話し合った内容を付箋に書き留める役割を担うなど、地域コーディネーター研修の知識などを活かすことができました。

こうした取り組みが実を結び、イベント後も継続して、子育て支援センターの施設内に掲載いただけることになりました。

当日の様子
月齢が高くなると子ども達が自由に動き回るため、見守り役などかなりの人手、広さを要すること実感した。

オ　イベント後アンケート

実施後のアンケート（回答数 19 組）では、参加のきっかけとして「親子で参加できる」に加えて「ベビーヨガに興味」が最も多かった一方で、楽しいと思ったプログラムでは「たまっぷ」が「ベビーヨガ」を上回り、参加しやすいプログラムで呼び込みつつ、イベントの目的であったパパ同士のつながりや地域の魅力発見の取り組みが評価されたことが分かりました。(表 1,2 参照)

またパパ同士で話せた人は 80%、多摩地域をオススメしたくなった人は 93%とこちらもパパ同士のつながりや地域への愛着といった主目的がおおよそ達成できました。(表 3,4 参照)

広報については、事前のヒアリングでパートナーへの広報、市を通じた広報が重要との仮説を立てていたものの、想定よりも会場・地域の重要性が高いという気づきも得ることができました。(表 5 参照)

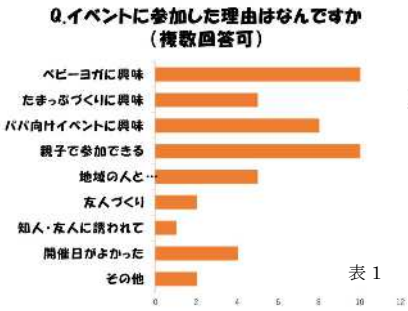


表 1

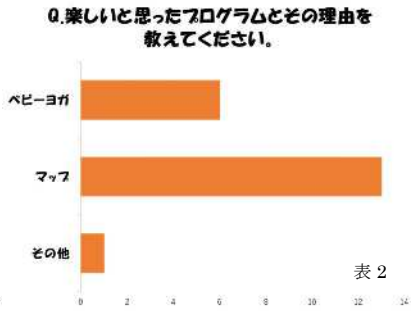


表 2

表 3

表 4

表 5

カ　振り返り

今回のイベントを通して、北部地域への愛着向上、パパ同士の繋がりを広げるきっかけになったのではないかと考えます。地域で活動する団体については、まだ知られていない部分も多いようなので、市内の活動団体を広く知ってもらいたいと感じました。

課題としては、子ども向けのイベントには見守り役など多くの人手や会場の広さが必要となること、そして、企画内容の検討や関係者との調整に時間を要することが挙げられ、グループで活動する際の役割分担や時間配分に注意する必要があると感じました。また、当日のイベントに参加した方々のアンケートでは、今回のようなイベントにまた参加したいという声が多くありましたので、今後も市内にある施設を活用しながら、市民の交流を促進するイベントを実施できたら良いと感じました。プロジェクトに携わった全ての方達との協働で完成しましたことに、末筆ながら感謝を申し上げます。

小さな世界をつくりたい（B グループ）

●プロジェクトメンバー
嶋 田 洋 紀　麻生区役所地域みまもり支援センター保護課
白 井 秀 興　高津区役所まちづくり推進部生涯学習支援課
髙 橋 ありさ　川崎区役所道路公園センター管理担当
山 岸 朔太郎　高津区役所危機管理担当
米 澤 快 人　麻生区役所区民サービス部区民課

ア **キックオフ**

７月１８日（木）に行われた第 1 回集合研修では、市民協働のまちづくりをはじめ、企画づくりの基本的な考え方やプロセス等について学びました。企画づくりの前に、「私たちはこんなチームです」をテーマにグループミーティングを行いました。所属が異なれば、経験年数も異なる多様なメンバー構成でしたが、話をしていくなかで、メンバー全員に海外留学や海外遠征、語学検定など、外国につながる経験があることがわかり、「多文化共生のまちづくり」をテーマにすることに決めました。

「何をどこでやりたいか」という話し合いでは、地域のつながりが希薄になっている一方で、市内の外国人人口が増加し、私達の身近なところでも多くの外国人市民が生活していることに着目し、同じ地域で暮らす日本人と外国人市民が垣根を取り払ってつながれるような「小さな世界をつくりたい」という切り口から検討しました。日本人と外国人の双方の文化を理解し合える内容として、縁日やクリスマスマーケットなどの案が出ましたが、イベントの具体的な対象や開催地、協働相手については、地域で行われているイベントや地域で暮らす外国人市民が抱える課題などを調査したうえで、地域で活躍する団体にヒアリングを行うことにしました。

イ **課題の発見・企画検討の経緯**

外国人市民を取り巻く課題等の分析に向け、市民文化局市民生活部多文化共生推進課に相談したところ、公益財団法人川崎市国際交流協会をご紹介いただき、交流事業課の安藤課長ほか３人の方にご協力いただきヒアリングを行いました。

まず、外国人市民が抱えている課題について、年代や性別、暮らしている地域などによる違いというより個人の生活に由来することが多いとしたうえで、外国人市民にイベントに参加してもらうには、狙いを明確にすることが大切と伺いました。

国際交流協会では、ポスターやホームページ等で広報を行っているものの、閲覧する人が限られているほか、企画内容や広報手段など様々な要因が絡み合い、思うように人を集めることが難しいという経験を伺うことができました。そのことから、外国ルーツの子どもをもつ保

護者を対象にした小学校入学事前説明会など対象が明確なイベントにすることがポイントと考え、子どもを対象としたイベントは親子での参加を見込めるのではないかとご意見をいただくとともに、今後の展開ついて、各区の地域振興課や市民館等へヒアリングを行うことで地域の実情がわかり、実施場所の選定にも役立つと助言をいただきました。

後日、以上の結果をグループで共有し議論を行い、市内でも人口の増加が顕著であり、川崎市国際交流センターの所在地でもある中原区を開催地の第一候補に設定し、中原区の地域振興課へ相談することとしました。

ウ　協力団体へのヒアリング

中原区役所地域振興課では、区役所５階に設置されている中原区民交流センター「なかはらっぱ」に登録しているサークル団体やボランティアグループ等が載っている市民活動紹介冊子「なかはらっぱの仲間たち」を教えていただきました。「なかはらっぱ」は新しく中原区民になった人、仲間がほしい人、活躍の場を探している人など、いろんな人が集まり、話すことができるカフェのような場所です。

その中の子ども・子育て支援に関わる団体から、０～３才までの子どもをもつ外国人と日本人を対象に情報交換や仲間づくりをしている国際子育てひろば『コアラ』にヒアリングを依頼することに決めました。

コアラは、月に２回開催される３才までの子どもをもつ親の交流の場で、情報交換のほか日本の行事、外国の歌や踊り、ハロウィーンやクリスマスなどのイベントを参加者みんなで企画しています。代表の米澤さんから９月の活動で絵本の読み聞かせを実施すると伺い、ヒアリングと合わせて活動を見学させていただくことにしました。

活動当日は、お母さん５人と子ども６人の計１１人が参加していました。そのうち１組の親子は初参加でしたが、米澤さんはもちろん、参加者１人１人が温かく、気さくで、初参加ながらも場に馴染んでいるという印象を受けました。絵本の読み聞かせも、特定の人がみんなに読み聞かせるのではなく、参加者が持ち寄った絵本を持ってきた人自身が読み聞かせるという形式で、参加者の参画意識の向上や参加者同士を交流させるための工夫が感じられました。

活動後、米澤さんから開設に至った経緯や想い、外国人が持つ悩みについて教えていただくことができました。その中でも、「育児の相談や教育面での悩みが増えているため、相談できる場所が必要」、「外国人市民は、日本のことを知りたいし、自国のことや文化等についても知ってほしいと思っている」という外国人市民の思いを知り、お互いの文化を楽しみながら学べる楽しいイベントを実施しようという方向に話が進んでいきました。

国際交流ひろば「コアラ」代表の米澤さんとメンバー

エ　企画内容の決定

ヒアリングの内容からイベントの目的を、①小さな子どもを持つ親同士のつながりづくり、②同じ地域で暮らす外国人市民の存在を認識する機会をつくるとともに、異文化への興味・関心につなげることの２つに設定しました。

以上のことをふまえたうえで、「小学校に通う子どもをもつ親と比べて、未就学児の親はコミュニティを持ちづらく孤立しやすいのではないか」という考えから、対象は 6 歳までの子どもをもつ保護者に設定しました。

会場は、日本語教室のほか講座やイベントを実施している施設が、イベント後も第 3 の居場所になり得ると考え、中原市民館に決定しました。

内容については、異国の文化や言葉・音楽に触れて興味を持つきっかけになること、レクリエーションを通じて参加者同士の距離感が近くなることを期待し、①多文化読み聞かせとレクリエーション。「子どもの成長の記録を残したい」という親の気持ちに寄り添い、集客につなげる②手形・足形アート。華やかで美しい衣装や国際色豊かな外貨に触れて、参加者同士の会話を引き出す③民族衣装と外貨の展示の 3 つに決定しました。

オ　実施に向けた準備

次に決定した企画に協力していただける団体を探しました。

民族衣装や外貨については、米澤さんに貸していただけることになりましたが、元々読み聞かせを専門に行っているわけではないことから読み聞かせについては別団体を検討することにしました。

中原区役所地域振興課から、多言語による様々なアクティビティを行っているヒッポファミリークラブの福村さんをご紹介いただきました。福村さんは、フランス語などの外国語を用いたレクリエーション・ゲームが得意とのことから、当初は読み聞かせのみの予定でしたが、レクリエーション・ゲームも企画内容に加えました。

また、当日のお手伝いとして、「川崎ワカモノ未来ＰＲＯＪＥＣＴ」に参加している高校生２人にも協力していただけることになりました。

企画内容と協働相手が決まった段階で、イベントの広報活動も始めました。広報手段としては、ＳＮＳによる広報と紙のチラシの ２ 種類とし、ＳＮＳは協働・連携推進課の公式 Instagram 及び多文化共生推進課公式 X、Facebook で企画内容を掲載する形で広報を行いました。

紙のチラシについては、第２回集合研修で学んだチラシのデザインやレイアウトの工夫の仕方を参考に、石塚計画デザイン事務所のスタッフのみなさんにも助言をいただきながら、見やすく、国際色を強調したデザインに仕上がりました。

日本語が母語でない外国人市民に配慮し、漢字にはふりがなを振り、また、英語版のチラシも作成しました。チラシの配架先には、外国人市民向け事業を行っている中原・高津市民館や国際交流センター、親子が多く利用する施設として地域子育て支援センター・中原区地域ケア推進課に協力を依頼しました。また、米澤さんには、コアラ内での広報もご協力いただきました。

カ イベント当日の様子

令和６年１２月２２日（日）に「はなす！つながる！マルチカルチャー」を実施しました。当日は、コアラの米澤さんの他に、ヒッポファミリークラブの福村さん、川崎ワカモノ未来ＰＲＯＪＥＣＴに参加する高校生２人にご協力いただき、３つのブースを運営しました。

① 絵本の読み聞かせ、レクリエーション（多言語のゲーム等）

福村さんに、日本語とフランス語の絵本を読んでいただく時間や多言語を用いたゲームで場を盛り上げていただきました。英語を流暢に話すことのできる参加者にも絵本を読んでいただき、参加者同士の交流の輪ができていました。

② 手形・足形アート

手形アートでは、大樹の中にある「まちのひろば」にいろいろな国の人が集まる様子をイメージし、参加者の手形を葉に見立て、カラフルな葉で大樹を彩りました。

足形アートでは、日本の象徴である富士山を背景に、今年の干支である「巳」を用い、足形アートを作りました。参加者の皆さんからは「良い思い出になる」、「成長の過程がわかる」等の声を聞くことができました。

③ 民族衣装および外貨の展示

女性スタッフは、民族衣装を着て参加者を迎え入れました。参加者は普段目にしない民族衣装や外貨に驚いており、日本人市民が外国の文化を知ることができるのは、こうした実際に目にしたり手に触れたりする機会があってこそだと改めて感じました。

キ イベントの振り返り

当日は、７組の親子連れに参加いただき、絶えず笑顔があふれる明るい雰囲気でした。一方で、イベント全体を通していくつか課題もありました。

グループのメンバーからは、①イベント内での参加者の交流の難しさ、②外国人に向けた広報の難しさ、③企画の対象年齢にあった内容の検討の３点の課題が見つかりました。

１点目は、イベントの中で参加者同士が交流できるような時間の「ゆとり」がなかったこと、

複数のアクティビティを同時に行っていることから、グループのメンバーが交流を促すことが難しかったことなどが考えられ、対策として、アクティビティをひとつに絞る、雑談や情報交換の時間を設けるなどの工夫が必要だと思いました。

２点目は、国際交流協会でのヒアリングにも話にあがりましたが、外国人市民がどういった手段で情報を入手しているかをつかむのが難しく、特定の場所でのチラシの配架や不特定多数向けのＳＮＳ上の広報では目に留まりにくいようで、既に外国人市民とのつながりを持っている団体での宣伝や、知り合いからのクチコミの方が効果的であることが分かりました。広報の範囲を拡大したり、期間を長く設けたりする等の対応で、外国人市民の目に留まる、あるいは、それを見た日本人の口から外国人市民につながる可能性が高まる等の効果を得られるのではという気づきにつながりました。

３点目について、当初は６才以下を対象にしたイベント予定でしたが、実際の参加者は３才以下の子どものみでした。これはイベントの内容が幼児向けであったことが要因として考えられます。「子ども向け」とひとことで言っても、企画内容によって対象になる子どもの年齢も大きく異なるということが分かり、手形・足形アートを工作などにすると当初想定した対象年齢の参加につながると考えを改めることができました。

最後に、イベント後のつながりについて、私達メンバーは３つのつながりを考えています。

１つ目は、イベントの参加者同士の「個人」のつながり。気軽に会うことができ、子育ての情報共有や悩みの相談ができる仲間と末永い関係を築いていってほしいと思います。

２つ目は、参加者個人と「コアラ」や「ヒッポファミリークラブ」のような「団体」とのつながり。同じ課題を持つ仲間同士で集まれて賑やか、かつ決まった場所がある安心は他では得難いものが感じられますし、団体同士のつながりにも期待しています。同じ方向を向いていても、それぞれの団体の得意分野は異なると思いますので、同じ課題を持つ団体同士が関わり合いながら、地域の課題を乗り越えられるようになっていくとうれしいです。

そして、３つ目にイベントを実施した市民館という「場所」とのつながりです。活動の場がみつかると、そこの中での人や団体との出会いで未来の可能性が広がるように思います。市民館という活動の拠点でやりたいことをみつけてほしいと願っています。

これらの出会いの中から、また新しい「まちのひろば」が生まれていくと良いなと思います。

今回のプロジェクトにご協力いただいた全ての方達との協働で完成しましたことに、末筆ながら感謝を申し上げます。

5　さいごに

この研修は、職員がまちに飛び出し、地域の方々と連携しながら「まちのひろば」をお試しで実践するなかで、コーディネートスキルや市民志向、チャレンジの意識を磨いていけることを目的として開催してきました。

プロジェクトを進める上では本来業務との調整を行いながら研修時間を捻出したり、普段経験したことのない様々な調整作業など苦労した面もあったと思いますが、グループメンバーとの協力や関係団体のみなさんのご協力により企画をやりとげ、当日も地域の方や参加者のみなさんが楽しく参加されている様子を見て、大きな達成感や充実感が得られたのではないかと思います。

最終回の集合研修の様子や実施後のアンケートの結果からも、それぞれの参加職員の気づきや成長が感じられ、事務局及びオブザーバーとしましても、とても感慨深く実り多い研修となりました。しかしながら一方では、昨年同様、企画実施までの打合せ回数等に負担を感じるなどの意見があったことから、次年度に向けてはさらに進め方を改善していきたいと考えます。

最後に、それぞれの企画を実践する中で、様々なアドバイスや調整をいただき、地域の方とつないでいただいた関係部署の皆様、誠にありがとうございました。また、業務多忙にも関わらず、参加職員を送り出していただいた職場の皆様にも御礼申し上げます。

そして何よりも、職員の思いを受け止めて、ヒアリング等にお時間を割いていただき、企画実現にお力添えをいただいた地域の皆様方に、深く感謝申し上げます。

今後、様々な職場において業務に従事していく中で、このたびの研修で得た知識や経験が参加職員にとって大変大きな力となり、地域の人たちと一緒にかわさきのまちを創っていく原動力となることを願っております。本当にありがとうございました。